

# 茨城・栃木県中学入試概況

## 1. 茨城県概況

茨城県の公立小6の児童数は義務教育学校も含めて約23,400名で、昨年度より約500名減っています。2月28日現在の各中学校の応募総数は公立一貫校も含め約11,000名(公表校のみ)で、昨年度最終の約10,300名から増えています。茨城県の中学受験の規模からすれば「かなり増えた」と言ってよい増加数ですが、次の記事でわかるように、県外からの開智望中等の併願受験生が増加の中心で、同校の増加分を差し引くと、児童数の減少率にほぼ見合う応募総数の減少になります。以下、地域ごとに見ていきます。

## 2. 県南(土浦・つくば市等)地域

県南のトップ校・江戸川学園取手は難関大ジュニア、東大ジュニア、医科ジュニアの3コース制です。各コース各回次合計の応募者数はほぼ昨年度と同数で、回次ごとでは少し増減が見られますが例年の変動の範囲でしょう。合格最低点は2月の3回が各コースとも下がっています。出題内容との関係はありますが、全体に入試の早じまい傾向が出ていることから、その影響でやや入り易くなったのかもしれませんが、他の回次は昨年度並みで、難度は各コースとも変わっていないようです。

開校5年目の開智望中等は、学校設立の認可条件の関係で、地元の守谷市、つくばみらい市以外の茨城県内からは入学者が5名までに制限されています。千葉県など、県外からは制限がありません。上記のように、今年度は各回次合計の応募者数が昨年度の2倍以上と大きく増えています。応募者数で最も多いのは1月15日の開智併願型、次が2月4日の開智日本橋併願型です。開智併願型は開智所沢中等の開校もあつての増加で、開智日本橋併願型の増加も、開智日本橋学園の人気があつてのものです。このように書くと、開智望中等自体の人气が今一つのように思えます。実際、これらの入試を差し引くと小規模な入試になりますが、それでも増加していて、少しずつですが地域の受験生に浸透してきました。本稿執筆時点で合格最低点は未公表ですが、難度面では昨年度とあまり変わっていない

ようです。

茗溪学園はアカデミアクラスと茗溪ジェネラルクラスの2コース制です。両コース各回次合計の応募者数は昨年度並みで、12月16日の1回がやや増えています。合格最低点は1回が昨年度並みですが、他の回次は少し下がっていて、出題内容との関係はありますが、やや入り易くなったのかもしれませんが、常総学院はアドバンストクラスとスタンダードクラスの2コース制です。両コース各回次合計の応募者数は少し増えている、女子の増加が目立っていて、女子の人気上昇がうかがえます。実際の受験者数、合格者数も増えている、合格最低点は12月2日の適性検査型入試が下がっていますが、出題内容の関係でしょう。他の入試は昨年度並みで、難度に変化はなさそうです。

土浦日大は各回次合計の応募者数が昨年度並みです。回次ごとでも男女別でも目立った変化は見られません。安定した人気です。本稿執筆時点で合格最低点は未公表ですが、今年度も併願受験生中心の入試ですから、難度に変化はないでしょう。東洋大牛久も各回次合計の応募者数が昨年度並みで、回次ごとや男女別でも目立った変化は見られず、同校も人気は安定しています。やはり本稿執筆時点で合格最低点は未公表ですが、難度は昨年度並みでしょう。

青丘学院つくばは寮制の性格上、今年度も小規模な入試でした。

公立中高一貫校も見てみます。県立の中高一貫校の第一号、並木中等は男子の応募者が増えている、女子も少し増えています。実際の受験者数も同じ傾向ですが、合格者数は変わらず、男子は少し難化、女子もやや難化したのかもしれませんが、竜ヶ崎第一高附属は40名募集ですから応募者数も小規模ですが、男女とも応募者は少し増えています。男女ともやや難化したのかもしれませんが。

公立トップ校の併設中である土浦第一高附属は、女子の応募者が増えて男子は減っています。実質倍率にも反映されていて、女子は少し難化、男子はやや入り易くなったようです。

### 3. 水戸近辺から県北方面

茨城は12月2日の1回A、1月28日の2回の応募者が減っていて、12月3日の1回B(適性検査型のみ)は昨年度並みの応募者数でした。合格最低点は1回Bと2回B(2回の適性検査型で教科入試と同一日)が昨年度並みで、難度もあまり変わっていないようですが、他の回次は上がっています。出題内容との関係はありますが、少し難化したようで、応募者の減少も受験生が絞られた結果だったようです。茨城キリスト教学園は今年度も応募総数が未公表ですが、各回次合計の受験者数は少し減りました。地域の児童数の減少が影響しているようです。合格最低点などは公表されていませんが、少し入り易くなったかもしれません。水戸英宏と国立の茨城大附属は、本稿執筆時点で入試結果が未公表でした。

公立中高一貫校では、公立トップ校の水戸第一高附属で女子の応募者の増加が目立ちました。男子は昨年度並みです。女子は実質倍率が上がった分難化したようです。男子は昨年度並みの難度でしょう。勝田中等は女子の応募者が減っていて、男子も少し減りました。女子は、今年度は水戸第一高附属に流れた受験生が目立ったようです。男女とも少し入り易くなったようです。

日立第一高附属は、男子の応募者が減っていて、女子は少し増えました。男子の減少は地域の児童数の減少も影響しています。女子はやや難化したかもしれません。男子は少し入り易くなったでしょう。太田第一高附属は極めて小規模な選抜で、男子は実際の受験者数が定員を割ったため全員合格、女子は不合格者がいますが、実質倍率は一倍台で、難度はあまり高くなかったようです。

### 4. 鹿行地域

清真学園は12月10日の前期の応募者が大きく増えていて、小規模な1月20日の後期も増えています。もともと男子よりも女子の人气が高かった学校で、今年度は女子が昨年度並みの応募者数ですが、男子が増えて女子の応募者数に近づいてきました。後期の合格最低点は科目の関係上未公表ですが、男子は実質倍率が少し上がっていて、やや難化したかもしれません。

公立中高一貫校では、鹿島高附属の男子の応募者の減少が目立ちました。清真学園に流れたようです。女子の応募者数は昨年度並みで、男子は少し入り易くな

ったようです。女子の難度は昨年度並みでしょう。鉾田第一高附属は男女とも応募者が少し増えています。少定員ですから実質倍率にすぐ反映されますので、男女ともやや難化したかもしれません。

### 5. 県西(古河市、筑西市、常総市等)地域

この地域は公立中高一貫のみです。古河中等は、今年度は男子の応募者が減っています。埼玉県の私立中に流れた受験生が増えたのかもしれませんが。女子は昨年度並みです。女子の難度は変わっていないと思われませんが、男子は少し入り易くなったようです。下館第一高附属は、男女とも昨年度並みの応募者数ですが、もともと倍率水準が低い学校で、男子の難度はあまり高くはありません。女子も難度は昨年度並みでしょう。

下妻第一高附属は女子の応募者が少し減りました。男子は昨年度並みです。男子の難度に変化はなさそうですが、女子は実質倍率が下がっていて、少し入り易くなったかもしれません。水海道第一高附属は男女とも昨年度並みの応募者数で、難度も変わっていないようです。同校は下館第一高附属や下妻第一高附属よりも高い実質倍率で、関東鉄道常総線沿線でも中学受験は広がりつつありますが、まだ下妻市や筑西市ではなかなか広がっていないようです。

### 6. 栃木県概況

栃木県の公立小6の児童数は義務教育学校も含めて約15,800名で、昨年度より約500名減っています。2月28日現在では、公立一貫校を含む県内各中学校の応募総数が約2,100名(公表校のみ)で、昨年度とほぼ同数ですが、未公表校の関係から最終的に少し増えるかもしれません。以下、地域を分けて見ていきます。

### 7. 宇都宮地区

国立の宇都宮大附属は小規模な入試の学校で、今年度は男女とも昨年度並みの応募者数でした。合格最低点は公表されませんが、難度は変わっていないようです。私立では、作新学院は11月18日の1回の応募者が少し減り、12月の2回は昨年度並みです。同校はもともと合格者数や合格最低点を公表しませんが、難度面はあまり変わっていないようです。宇都宮短大附属は11月の1回の応募者が少し減っていて、12月の2回は昨年度並みでした。受験生が他校に流れているのかもしれませんが。1回は不合格者が少なく、合格最低

点も下がっていて、少し入り易くなったようです。2回は昨年度並みの難度でしょう。

文星芸術大附属は、入試結果を公表しない年もありますが、今年度は公表しました。小規模な入試ですが、前回公表した2021年度よりも大きく増えています。合格最低点は今回も未公表ですが、不合格者はあまり多くないこともあって、難度面はあまり変わっていないようです。2021、2022年度と募集を休止した宇都宮海星女子学院は昨年度から共学化、校名を「星の杜」に変更して再スタートしました。本稿執筆時点で入試結果は未公表です。

公立中高一貫校の宇都宮東高附属は、男子の応募者が減少、女子も少し減っています。男子は学力上位層が国立の宇都宮大附属などに流れたようで、合格者が目立って減っていますが、女子は合格者が増えました。合格最低点は公表されませんが、こうした合格状況から、難度は変わっていないようです。

## 8. 両毛線沿線地区、北部地区

両毛線沿線地区では、佐野日大は各回次合計の応募者数が大きく増えています。ただ、増加の中心は12月

17日に新設した首都圏入試で、水道橋の日大法学部が会場です。いわゆるお試し受験で、これを除くと少し減りました。同校は例年合格最低点は未公表ですが、不合格者が少なく、難度は昨年度並みでしょう。

国学院栃木と白鷗大足利は小規模な入試の学校で、国学院栃木の各回次合計の応募者数は少し減っています。やはり地域の児童数減少の影響でしょう。白鷗大足利も減っていますが、同校の場合、群馬県の館林や太田との受験生の流動があり、群馬県側の影響もあるようです。難度面は特に変わっていないようです。

公立中高一貫校の佐野高附属は、今年度は男子の応募者が増加、女子はやや減っています。実際の受験者数、合格者数も同じ傾向で、難度面では若干難化したかどうか、といったところでしょう。

北部地区では、公立中高一貫校の矢板東高附属の男子の応募者の増加が目立ちました。女子は昨年度並みです。女子の実質倍率は昨年度とあまり変わっていないので、難度も変化はなさそうですが、男子は上昇していて少し難化したかもしれません。寮制の幸福の科学学園は入試結果が未公表でした。

# MEMO